

- J. E. Floud, A. H. Halsey and F. M. Martin, 1956, *Social Class and Educational Opportunity*, Heinemann (本庄良邦訳, 1959, 『社会階層と教育の機会』 関書院)
- Raymond Boudon, 1974, *Education, Opportunity, and Social Inequality: Changing Prospects in Western Society*, John Wiley & Sons (杉本一郎ほか訳, 1983, 『機会の不平等——産業社会における教育と社会移動』 新曜社)
- マックス・ウェーバー, 1953, 『宗教社会学論集』 みすず書房

潮木守一 (名古屋大学名誉教授)

※ 1 Floud, Halsey and Martin, *Social Class and Educational Opportunity*

戦後社会の出発点

この本には出版間もない頃に、全く偶然に書店の店頭で出会った。その頃まだ学部生で、原書を買えるような身分ではなかった。大枚を投じて買い求めたものの、内容を理解するのに骨が折れた。この本はイギリスの中等教育の選抜制度の細部がわからなければ理解できないのだが、よくわからない点が多かった。誰に聞いたら教えてくれるのか、それさえわからない時代だった。だからこの本の内容を掴み取るのに苦労した。

1950年代のイギリスでは、11歳時点で学力検査を行い、その結果によって、すべての子どもを3種類の中等教育に分類する方式をとっていた。11歳といえば、日本の小学校6年生である。これほど早い時期に選抜を行えば、子ども当人の学力ではなく、親の学歴や所得水準で分けることになりはしないかが、気になった。このフラウドらの本はある地域を設定し、この選抜制度のもとでは、はたしてどれほど親の学歴・所得水準から自由な選抜が行われているのか、実際のデータを挙げながら検証していた。当然のことながらきわめて高い確率で、親の学歴や所得水準が子どもの進路に影響を与えていることが明らかになった。こうした調査結果をもとに、中等教育の選抜方式をいかに改革するか、一定の提案を行っていた。このようにこの本を通じて、イギリス社会で教育社会学という学問領域がいかなる社会的・政治的役割を演じているのかを具体的に知ることができた。

1950年代はイギリスばかりでなく、ドイツ、フランス、スウェーデンでも同様な調査が実施され、どの程度の教育機会の階層差があるのか、その実態調査の結果を報告していた。こうした流れをみていると、やがて日本でもこういう研究が避

けられなくなることが十分予感できた。そこで私自身いくつかのコミュニティを選び出して、中学から高校へ進学する段階で、どれだけ階層差、親の学歴による差が生じるのか調査していた。しかし問題は調査予算だった。一研究室の予算ではそれほど多くのサンプルをとることができず、いつももどかしい思いを抱いていた。しょせんこのようなことをやっても、それはていどのいい自己満足ではないのかという思いを拭い去ることができなかった。そのときに出会ったのが、次の研究成果であった。

※ 2 Boudon, *Education, Opportunity, and Social Inequality: Changing Prospects in Western Society*

コンピュータリゼーションのインパクト

この本のなかでブードンは上・中・下の3つの階層と、初等教育・中等教育・高等教育の3つの学歴段階をもった仮想社会を想定し、さらに学歴を獲得する際にどれだけ親の階層が影響を与えるかという指標と、社会的地位達成に当人の学歴がどれだけ規定度をもっているかという指標を選び、その度合いによって階層移動がどれだけ発生するかをシミュレーションさせていた。これは限られたサンプルの実態調査を根気よく積み上げるのではなく、ある仮想社会を想定し、その条件のもとで、学歴の階層的開放度が高まったり、地位の学歴規定度が低まったりすると、どれだけ階層移動が生じるかをコンピュータに計算させる手法である。この方式はいくら実態調査を積み重ねても、どれだけ現実に接近できているのかに疑問を抱いていた私には、魅力的な手法に映った。

ただ残念ながら、ブードンは学歴の階層的開放性、学歴による地位規定度について、アプリアリにある特定のパラメータを設定して、それを固定

したままで議論を展開していた。しかしこの2つのパラメータは固定されているのではなく、変化するのが一般的である。このパラメータをモデルの上で変化させたならば、どういう結果が出てくるのか、これが私にとっては課題となった。

そこでブードンと同様、上・中・下の3つの階層からなり、また初等教育・中等教育・高等教育という3つの学歴を配分する仮想社会を想定し、教育機会が最も平等に分配される状態と、それが最も不平等に分配される状態をクロス表に作り上げた。同じように社会的地位がすべての学歴層に平等に配分される状態と、それが最も不平等に配分される状態を想定した。このように極限状態は一義的に定義できるのだが、問題は中間状態である。この中間状態を定義する手法として、はじめは最もシンプルに補完法を使うこととした。この手法を使えば、パラメータを変化させながら、当人学歴と当人階層のクロス表が作られ、同じく親階層と当人学歴のクロス表も作り出せる。それが定義できれば、これらのクロス表をもとに、パラメータを変化させるごとに、どれだけの階層移動なり学歴移動が起こるのかを計算できる。こうした方法で移動率の計算を行った。

ところがこうした手法を使っているうちに、2つの極限状態からはみ出るケースが出てくることに気づいた。これは3×3の分割表の自由度が2であるのに、それを無理に1つのパラメータで表現しようとした結果であった。それではこの難点を克服するにはどうしたらよいか。この問題を考えているうちに、そもそも分割表とはいったいどういう意味をもっているのかという疑問に突き当たった。階層を3つに区分するのも、学歴を3つに区分するのも、恣意的な操作であり、現実の社会では階層も学歴も連続体ではないのか。

そこで現実社会を連続体としてとらえれば、分割表ではなく、正規分布を基本とし、平均値や標準偏差を変化させながら移動率の変化を求める、あるいは正規分布の歪度、尖度を変化させながら、移動率の分布を求めたらどうなるかというアイデアにたどりついた。そこで一念発起して正規分布の数学基礎を勉強し始めたが、これが正直いって難物であった。そのうちに私自身の発想も変化し、デジタルな世界よりもアナログの世界のほうに興味関心が膨らんでいった。こうした興味・関

心の変化を与えたのが、第三の本であった。

### ＊ 3 ウェーバー『宗教社会学論集』

#### 矛盾した存在としての人間

その3冊目の本とはマックス・ウェーバー『宗教社会学論集』である。なかでも「中間考察 宗教的現世拒否の段階および方向の理論」に大きなインパクトを受けた。この論文のなかではウェーバーは人間の様々な営為を次々と取り上げ、その意味と限界を列挙していた。そのなかには科学・学問も含まれており、ウェーバーは学問・科学について悪魔的ともいべき診断を加えていた。

たとえば「科学は魔術からの世界の解放をめざし、すべての現象を自己完結的な因果関係に取り込もうとするが、自分自身の究極の前提はなにかという基本的な問いに答えようとはしない。それにもかかわらず、自分こそ思惟による世界考察の唯一の形態と主張し始める」といった文章に出会ったときは、はたと考え込んでしまった。その当時の私はもっぱらコンピュータを操りながら、生々しい具体的な人間をいっさい捨象して、システムとしての論理的整合性・一貫性を求めているが、はたしてこうした作業がどれだけの意味があるのか自分のなかから湧き上がる疑問を抑え込むことができなくなってしまった。

なかでも印象づけられたのは、ある目標をもって行かう人間の行動がある時点を超えると、当初否定しようとして試みていた当の状態を引き起こしてしまうというパラドックスの発想であった。こうした逆転の事例は彼の文章のなかで繰り返し登場してくる。そういう事例を読みながら、歴史とか人間の行動はこういうかたちで読み取る必要があるのかというヒントを与えられた。それは私には大きなインパクトとなるとともに、よい参考例となった。

このようにして私はある時期から計量分析から離れ、後世に残された文字記録を手掛かりに「物語」を読み解く方法に力点を移していった。数字で語るデジタルな世界には論理的・一貫性・整合性というまたとない魅力に溢れていたが、その反面、人間の営みのなかにパラドックスを読み取る作業もまた、別の種類の魅力を秘めていた。